《My Revolution ー第2章ー》

作詩: 川村真澄　作曲: 小室哲哉　オーケストレーション: 大村雅朗

演奏: 渡辺美里［独唱］、 ディビッド・パリー指揮フィルハーモニア管弦楽団

原曲は《My Revolution》そのもので、これはそのオーケストラ・バージョンといふことになります。しかし、単にオーケストラ・バージョンとして括るにはあまりにもつたいない質の高さがあります。私はこれを発表時に初めて耳にしたとき、オーケストラの響きにたゞならぬものを感じました。それまでにも歌謡曲などのオーケストラ・バージョンはいろいろと出回つてゐたのですが、それらとは一線を画する風格があると思つたのでした。ラヂオ放送によるその衝撃を胸にレコード店に急ぎ、この曲が収録されたシングルＣＤを入手しました。演奏者はクレヂットされてゐませんでしたが、数箇月後に発表されたアルバムで明らかになり、(生意気にも)「おゝ！ やはり本格派だつたか！」と思つたものです。

しかしながら、こゝで特筆したいのは、その演奏面の品格もさることながら、編曲されたスコアの質の高さです。それまでは大村雅朗といふ人はごくごく普通の仕事をしてゐる印象しか私にはありませんでしたので、これほどクラシックのオーケストラを活かし切つた厚い編曲をものにするとは、実は意外でした。無論プロのアレンジャーですから、その気になれば誰でも同様の仕事はできるのかもしれませんが、実際に録音されるものには、これほどの響きが聴けるものはさうはないのが現状でせう。あるいは、オーケストラは厚く響かせるものゝ、リズムセクションにエレクトリック・ベースやドラム・セットを残すことでポップス色を敢へて消さないやうにするといつた傾向も多々あり、結局、純粋なクラシックの管弦楽を使用する歌謡曲のオーケストラ・バージョンは数少ないといへます。さうしたなかに現れたこの小室メロディーの大オーケストラ伴奏版は、大村雅朗入魂の編曲とも形容できさうな一大プロジェクトだと思ふ訳です。

やゝ神秘的なフルートの歌と弦のさゞめきで始まるおよそ７分間の管弦楽伴奏による独唱曲は、原曲を知らぬ者にとつてはその親しみやすい歌謡性に「流行歌のやうな歌曲だ」などといふ本末転倒の感想を抱かせても不思議ではない響きで迫ります。弦楽器群による雰囲気づくりが主調ですが、木管・金管・打楽器に加へハープやピアノも含め、一通りの管弦楽の楽器がすべて使用されます。

前述の冒頭部分に続いて、ハープの分散和音が弦楽器群のハーモニーとともに美しく響き、後半はホルンの咆哮も交へながら最初の盛り上がりをみせますが、このときのさゞ波を彷彿とさせる弦と木管がとてもすてきです。こゝまでがサビ先行型の楽曲における大きな導入部といへます。

続いては、いよいよ第１旋律が提示され主部が始まるのですが、第１コーラスの第１旋律は最初の盛り上がりを一旦鎮め、ハープに替はつてピアノが分散和音を奏でます。第２旋律に移ると弦の刻みのリズムに乗つてホルンが朗々と流れ、オーボエがそれに絡みます。こゝは幾分の緊張感があるでせうか。

その後、弦楽器群による扇動的な楽句を経てサビが回帰しますが、サビに移る直前にはリタルダンドの盛り上がりを聴くことができ、ティンパニや金管も顔を出します。サビに移ると弦楽器群の実に躍動的な刻みが印象的で、金管群もそれに呼応し木管は花を添へます。金管の連奏ののちにシンバルの静かな一撃が出て前半が終はるこゝまでゞ約3分50秒です。

間奏は、ハープや弦をバックにオーボエとソロ・チェロが旋律を優美に奏でます。

間奏後の第２コーラスは、弦の小刻みとホルンで始まり、途中クラリネットが聴こえるとハープやピアノも加はります。ティンパニのロールを経て後半になると躍動感が増し、間奏前にも聴けた扇動的な弦楽器群の楽句が奏されたあとの5分20秒前後以降は最大の山場となります。

アラルガンドが効いたタメのあとは、４分音符の下降音形が続くマエストーソ

が始まります。そして、このマエストーソのあとはオーケストレーションだけで感動の涙を誘へるほど次から次へと厚い編曲が迫ります。迫るといつても決してテンポを上げて煽るのではなく、楽器の絡みが迫るのです。ティンパニのロールと一撃、中低弦（バイオリンのG線も含まれるかもしれない）のうねり、低音部全体の応答、ホルンの咆哮、高弦のロングトーン、中低音部の応答、ティンパニのロールと８分音符の連打、金管のファンファーレ風楽句などなどが次から次へ繰り出され、さうした編曲の力が聴き手に迫つてくるのです。

そして、この大きな大きな山を越えると、グロッケンやフルートの優しい響きが厚いハーモニーとともに聴こえ、最後はチューブラ・ベルも加はり全曲を静かに閉ぢます。

以上、こゝに書いたことには、大いなる勘違ひ（実際スコアを確認した訳ではないので大いなる勘違ひどころか大嘘も!?）もあるかもしれませんが、とにかく実際にお聴きになれば、「当らずとも遠からず」といふことはおわかりになると思ひます。いづれにしても、これは、編曲スコアだけでも感涙を呼べるほどの、日本の歌謡曲の編曲史上、永く語り継がれるものだと確信するものです。

残念ながら、この仕事を手掛けた大村雅朗氏は数年前に亡くなられたやうですが、奥慶一や佐橋俊彦、宮川彬良や服部隆之、あるいは渡辺俊幸、齋藤毅(ネコ)らをはじめ、様々な作編曲家が、また同じやうな仕事をしてくれるだらうと期待してゐます。（こゝに挙げた人たちはいづれも、オーケストラ伴奏版とは異なるオーケストラ演奏版、いはゆるインスト版では手堅い編曲を発表してゐる人たちです。もちろん私が知らないだけで、他にも大勢の有能な音楽家が存在することもまた事実でありませう）

（文: 長谷部宏行 [初版:2001年以前/改訂:2013年] ）